

# 美意識の回復こそ 新しい時代建設の鍵

～コントロール出来なくなった人類の活動～②

(株) 人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

(前号より続く)

## 5. 工業社会から情報社会へ 経て脳業社会へ

「そこでは美意識の涵養と  
創造力(脳耕作業と脳産物)  
が不可欠」

今日大量生産、大量輸送、大量消費、大量廃棄の工業社会から情報社会を経て、脳業社会へ突入し始めている。そこでは何が求められるのだろうか。それを次に考えてみよう。

少なくとも今までの文明化のプロセスの中では、日本人が本来持っている筈の自然美の反映としての日本人の審美眼を弱めて来たと言った。それではそれを回復するチャンスは巡って来るのだろうか? その1つのチャンスは大きく文明が変化する時である。まさに今がその時である。明らかにその文明化は、工業社会から情報社会を経て、脱情報化社会(Past Informative Society)としての脳業社会(Brain Work Society)へ突入している。ここでは脳耕作業(創造力)と、その

成果としての脳産物が極めて大きな意味を持っている。そしてその脳産物の生産には理性よりも感性、論理よりも直観、特に美意識が本質的になつてきているように思える。この事は我々に何を示唆しているのだろうか?

現実社会を良く眺めると、興味深い事が浮かび上がってくる。既に世界の芸術家でなく、一流の起業家が美についての学びと実践を行い始めている。それが今日の主要な動きの1つなのである。

そして工学系のMBAよりも、美術系MBAを求める人々が増えている。

世界で唯一美術系の学校として、修士号も博士号も出せる英国のRCA(Royal College of Art)に起業家の入校希望者が増えている。世界的にヒット商品、掃除機、扇風機等々を始めとして続々と出している英国ダイソンの創業者ダイソン氏は、プロダクトデザインを同校で学んで、その成果を出し、大成功している。逆にMITやスタンフォードといった一流大学のMBAコースの人氣が衰え



Royal College of Art

始めているのだ。

様々な電子機器のメーカーとしてのソニーも、美に対しての社員の意識の啓蒙と普及に力を入れているし、CEOやCOOに並んでCAO (Chief Art Officer) を加える企業も出ている。そして世界中の企業のトップで今日の社会で成功している多くが文学や芸術に関心の高い人々であることが調査の結果判明している。まさにビジネスの世界でも教養が求められているのである。

明らかに最近では、物不足で大量生産の望まれていたマズローの価値欲

求5段階説の最下位の生存の欲求を求め始める時代とは大きくかけ離れた時代が到来し始めている。「大衆貴族社会」の登場である。この辺りに関しての詳しい解説書もまた沢山出版されているので、それらを参照して欲しい。ここでの重要な論点は、新しい脳業社会は明らかに「物から心」、そして「3つの栄養(胃袋、心、脳)」を必要とする時代であり、プロセスエンジニアリングからプロダクトエンジニアリングへ技術に求められるものがシフトし、仮にベータシックスインカムが実施されるまでにAI、ロボット、そしてIoT等による生産能力の向上が進めば、人々はその人生をより感性レベルでの時間消費をする事が、生活を充実させていく上で不可欠の時代となるであろう。まだベータシックスインカムが実現化出来る状況には、地球社会はなっていない。しかし現実に脳業社会は既に到来している。

脳業社会とは、脳民が脳具を用いて脳場で「脳耕作業」をし、「脳産物」を生産(創造)する社会であり、脳耕作業による脳産物とは、人間の脳内では新しい知識、新しいイメージ

の創造物に他ならない。まさにそこで求められるのは、今までの如く、知識、理性に基づく合理的な判断力のみではなく、直観的閃きや想像力や発想力であり、それらに内在している人々の美意識そのものが必要不可欠となる社会なのである。

いかに美意識を高めるかが脳業社会における教育の中心となるべきテーマである。と同時に実践の場で求められる能力なのである。それを高めねば世界有数の審美眼を本来持った民族であるに拘わらず、新しい時代に日本は更に遅れていく事になるだろう。そして今日よりもっと世界から相対的に遅れた国になり下がっていく事になる。この点の認識を大衆的に日本国民、特に指導者層が持つ事が大切である。そこで1つの過去の話しを教訓的にしてみる事が大事になる。それは民衆運動である。しかし日本人の保守性は、どうも速い変化の時代には遅れがちになる文化的特性を持っているので、その変化への対応は難しいようだ。特に失われつつある日本人の美意識に関して!

しかし忘れてはならない事があ

る。「真の天才は直感がそもそも論理化されている人物」とも言える事である。これから脳業社会においては、まさに感覚的であつても、結果的に感覚的に判断した内容が論理化されているような人物が活躍する時代なのである。将棋の羽生名人は、何よりも勝利の為には、「将棋の棋譜そのものが美的に美しいと感じられる手を打つ事が大切」であると語っている。

まず直観的に将棋の棋譜の美しさからスタートして、それを出来る限り論理的に推論して、最後の詰めに持つていくことが大事と羽生名人は語っているのである。そこでは感性と知性との調和がなされていて、アートとサイエンスのバランスの良さが巧みにデザインされている。

それと同じように、これからの時代は極めて合理的な知性に基づくサイエンスと、一見して非合理的な感性に基づくアートとのバランスこそが新しい脳産物(創造物)を生み出す時代の到来なのである。しかし間違えてはいけないのは、今までも成功した人々の多くは、そうした事を実践してきた。これからはそれらを

一般大衆が実践していく事が望まれる時代の到来である。ここではその事を語っている訳である。

しかし一般大衆にそうした能力が身に付かねば、大変な事態に直面することになる可能性がある。それは一部の優れた「脳民」が脳業社会での脳産物を今までの時代のレベルとは桁の違うレベルで独占し、かつ産業全体、更には政治の世界までを独占する恐ろしい状況、状態の登場が予想されるのである。それを私は「知的怪物（インテレクチャルモンスター）」の誕生の可能性と呼んでいるが、その考え方が悪しき方向に振れると、地球社会は恐ろしい状況を迎えることになるであろう。

## 6. 一部のエリートのハイカルチャーよりも、民衆芸術の普及へ

さて脳業社会において、脳産物の生産を適切に行うために美意識の重要性を指摘したが、ここでは更に一般の人々の日々の生活の中での美意識の涵養、向上の重要性に触れる。その前にアートがブルジョワジーの

ものと批判されていた事に一言触れておこう。

多くのアジアの国々において、ヨーロッパ発のハイソ芸術やハイカルチャーと呼称されるもの、例えば古典音楽のようなものの導入や流行に関しては、一時期様々な拒否や反対運動が生じた。日本においても、古典音楽等にしても敵性音楽として拒否の姿勢を取る事があったし、隣の中国でも激しい反発の一時期、即ち「文化大革命」があった。

それは良く吟味していくと、それらの反対論は、芸術性そのものの内容への拒否、反発というよりも、それらを担う人々が一部の政治経済的特権階級により担われていた事や、敵対する国々の生み出した文化であった事への反発であり、それらが

ブルジョワジーの所有物と見做された事に原因があったと理解する方が正しいであろう。どのような芸術も本来は、人類全体の至高の産物であり、上下の分け隔てなく味わえる筈のものなのである。しかし芸術の完成やその普及にはお金と時間とが不可欠であり、多くの社会でそれを大衆が担うのは難しかった。それ故その内容そのものよりも、担っている階級への反発が先だったと理解出来るのである。

いずれにしても、既に日本においても、中国においても「大衆貴族社会」が一部到来している事によつて、かつての特別な一部としての貴族社会から大衆化した貴族社会に移り、そうした特権階級の占有物と見做されてきた芸術が普通に支持されてい



柳宗悦等により、展開されていた「民藝運動」。

るのが今日という時代である。今最もピアノの生産量が多いのも中国であり、クラシックを習っている生徒数も世界1と言えそうである。

時代はまさに変わってきている。

そうした中で美意識を論じる上で留意すべき事がある。かつての日本においては、清貧に近い生活水準が、国民の大半のレベルであったが、そこで使用される多くの日常的な質素に見える生活用品が大衆の生活の中で生まれた実用品でありながら、かなりレベルの高い美術品と言えるレベルのものであったことである。多くの外国からの来日者により、それらが賛美され、自らの母国にそれらの素晴らしさを文章で伝えようと共に、かなりの現物を送っていた。シーボルト等は余りにも多くのモノを送ったので、「スパイ」と間違えられ、国外退去させられてしまった。しかし、今日ではそうした日本人の美意識は薄れ、芸術性が明治維新の西洋科学技術文明から導入と期を同じくして劣化していった。まさに白樺派の柳宗悦等により、展開されていた「民藝運動」の主張の如く、大衆（民衆）の育ててきた芸術（民衆芸術）を今一度民衆の間に取り戻そうとの試みは、改めて大きな意味のある運動であった事を再認識する時が来ているのだ。

そして今日、今一度我々はハイカルチャーと共に、この民衆の何気なく生み出す芸術、それは日常生活の中での民衆の芸術を復活する時が訪れているのである。

実際にはまだマズローの価値欲求5段階説の最上位の自己実現レベルに達している人は、今は全体の数%未満であろう。しかし脳業社会に実際に突入すると、人々はベーシックインカムを受け取る可能性が高まり、生活の経済的不安が除去されることにより、一気に人々の生活はその第5段階の最上位の自己実現の段階に突入する事になる可能性がある。そうした状況では、一気に脳産物の生産に人々が入り、そこでは圧倒的に、美意識を涵養する事のニーズの高まる事になる。

するようになると共に、より本質的な文化にアクセスする時間が増加していく。まさに文明と文化の相補性の回復の時の到来である。

そうになると、自分達に必要な食物を自家生産し、あたかもバリ島の農民達のように、昼間水田を耕しながら、夜や休日は、鋤や鍬を絵筆に持ち替えて絵を描いたり、小刀を巧みに用いて民藝品を彫ったり、ガムラを奏でて、踊りを舞い、神に向けての感謝を捧げる行為をより真摯に行うようになるであろう。但し、今のバリ島の住民は、観光化が進み、本来の自然と共生した生活を失いつつある。

まさに「鶏と卵」の関係であるが、そうした生活の繰り返しの中から、大自然との共生の下での美意識が涵養されるのか、そうした意識が先にあって、美意識を発揮出来るのか判らないが、そうした生活を取り戻す事によって、人々は美意識を次第に身に付け、それに基づく作品を生み出したり、優れた芸術家になったり、同時に優れた鑑賞者としての聴衆となっていく事になるだろう。

そうした民衆レベルの芸術活動の

興隆が、更により高次のハイカルチャーや哲学を生み、輝かしい第3次文化的ルネッサンスを生むかもしれないのである。そして世界の真の平和に近づく可能性を高めることになる。いずれにしても21世紀の民衆芸術運動が活発になる事が新しい日本の再生には不可欠なのである。逆に言えば、今日民衆の芸術性がそれだけ質が低下している事を物語っている。

出来れば、イタリアのヒューマンルネッサンスの頃にメデイチ家が、ギリシャのプラトンのアカデミアをフィレンツェに復興したように、日本に新しい文芸復興のアカデミアを築き、世界の人々を集め、世界の文芸復興のセンターとして欲しいものである。

## 7. 農業における美意識と

### 「農産物の尊重

かつて多くの来日外国人から礼賛された日本の日々の生活の中で築かれた民衆芸術は、どのようにして生まれたのか？それは「日本人の自然への感謝と、畏敬の下に自然との共



農業こそが日本人の美意識の涵養の原点

生の中で磨かれた農業そのものの中に原点を持つ」と言っても言い過ぎではないであろう。日本人の日本の自然との農業を通しての固有の共生の中で、芽生えた美意識こそが日本固有のものと評価して差し支えないと言っても良いであろう。

さてもう少し日本人固有の美意識を育てた日本の農業の背景を見ていこう。日本の水田稲作農業は、次の3つの制約の下で展開された。

1 周囲を海で囲まれた温帯、偏西風、モンスーン気候の孤状列島の下の国土の6分の1の農地での高度集約型農業



## 2 里山での運命共同体としての村落での移動の少ない定住生活

### 3 そこから動かさない水田での稲作作業の生産性を高める努力

何よりも固定された3重の空間（海に四方を囲まれている、村落共同体、水田）の中での共同生活と共同作業、そして四季折々の気候の変化の豊饒さの中での水田稲作農業生活であり、与えられた世界空間（田んぼ）の中での稲という植物の栽培であった。従って与えられた空間、時間の中での収穫を向上させる為に、稲そのものや肥料と共に、周囲環境の緻密な研究と、それに基づいた丁寧な稲作作業と手入れが必要となった。

何とも昔は、人力や牛馬が主体であり、日々が大変な重労働であった（『農事歴』を参照の由）。

そうした努力の中で、必然的に日本の農民は、自然の精巧な、かつ美しいメカニズムとファンクションとを詳細に理解すると同時に、人事を尽くして天命（お天道様）を待ちつつも、そうした中で巧みに生活していく術を身に付け、自然の無常観や

無機の静謐、そして有機の躍動感や複雑性を自然と覚え身に付けていった。同時に強暴で無慈悲の自然でもあったので、畏怖感も身に付けることになった。

そして諸々に感謝し、共同生活の中で倫理を身に付け、祖先と共に、神社や仏閣を慕い、年配者や祖先を大事にする事を身に付けていった。そうした中で諸行無常、変転流離の無常観を悟り自然の存在をお手本とした、あるいは自然の素材の特性を高度の産物を理解し、人々はそれを用いて、生かした生活必需品を匠の如く作り出していったのであった。また鎌や鋤、そして多くの耕作と工作用具としての術を身に付けていったのであった。多彩な道具を作り出すと同時に、それらの道具を大切に扱う習慣も身に付けていった。まさに自然と「民衆芸術品」と言われるものを意識することなく、自然と創り出していったのであり、そこには、自ずと自然を反映した「美意識」が入り込んでいたと考えて良いだろう。

そのように日本人の多くは元々農民である。田畑やそこで働く人々や

その成果を支配する側としての貴族階級が誕生すると同時にその自警団から発展して武士階級が誕生した。そして多くの生活用品を生産する職人（Craftsman）を輩出するようになっていった。それが日本人の大多数の人々の生活の歴史なのである。それは農業そのものが日本人の諸々の原点である事を強く物語っている。と同時に今日と雖も、農業が全ての生活の原点である事は変わらず、農業の価値は極めて本質的である。それ故に、本来農業の価値（農価）を日本人は第1義的に認識すべきなのである。

しかし今日では、その第1義的な農業の価値、即ち「農価」を日本人の大多数が、余り意識しなくなっている。それは自らの食卓がスーパーやコンビニに並ぶ、大量生産の商品で飾られていて、それらの棚に並ぶ以前の存在、即ち生産者、流通業者、加工業者や調理人等々に余り気を遣うことをしなくなってしまうている。生産者への思いや意識が遠のいているのだ。

そこに自然と人間との乖離が生じ、人間が自然を大切にしないや精

神を弱めると共に、人と人との関係も希薄化し、人類全体としての凄まじい自然生態系の破壊とCO<sub>2</sub>の無思慮の排出と蓄積等を許容し、結果して狂暴な異常気象を招いてしまっている。

私はこの事に対し、かなり多くの人が何となくおかししいし、問題だなどと感じていると思う。しかし実際の行動としてそれらに対し、殆ど何も起こす事がないのが今日の状況である。

我々は今1度、「人類がこの宇宙という自然の中で、生かさせられていゝ」事を知り、今1度ひとりひとりの生存がどのように可能になっていくかを再自覚せねばならない状況に置かれていると思う。

今日人々が「子どもを作り、生む」という言葉を用いるが、本来は、「授かる」という言葉を用いるべきである。それと同時に、農家の人々も野菜やコマを作るのではなく、人事を尽くして天から授かるという意識を取り戻すことが正しい認識であり、用語法と言えるだろう。

その為にも、今1度日本全体として農業を自らの意識の中に取り戻

〈従来の文明の行き詰まり〉

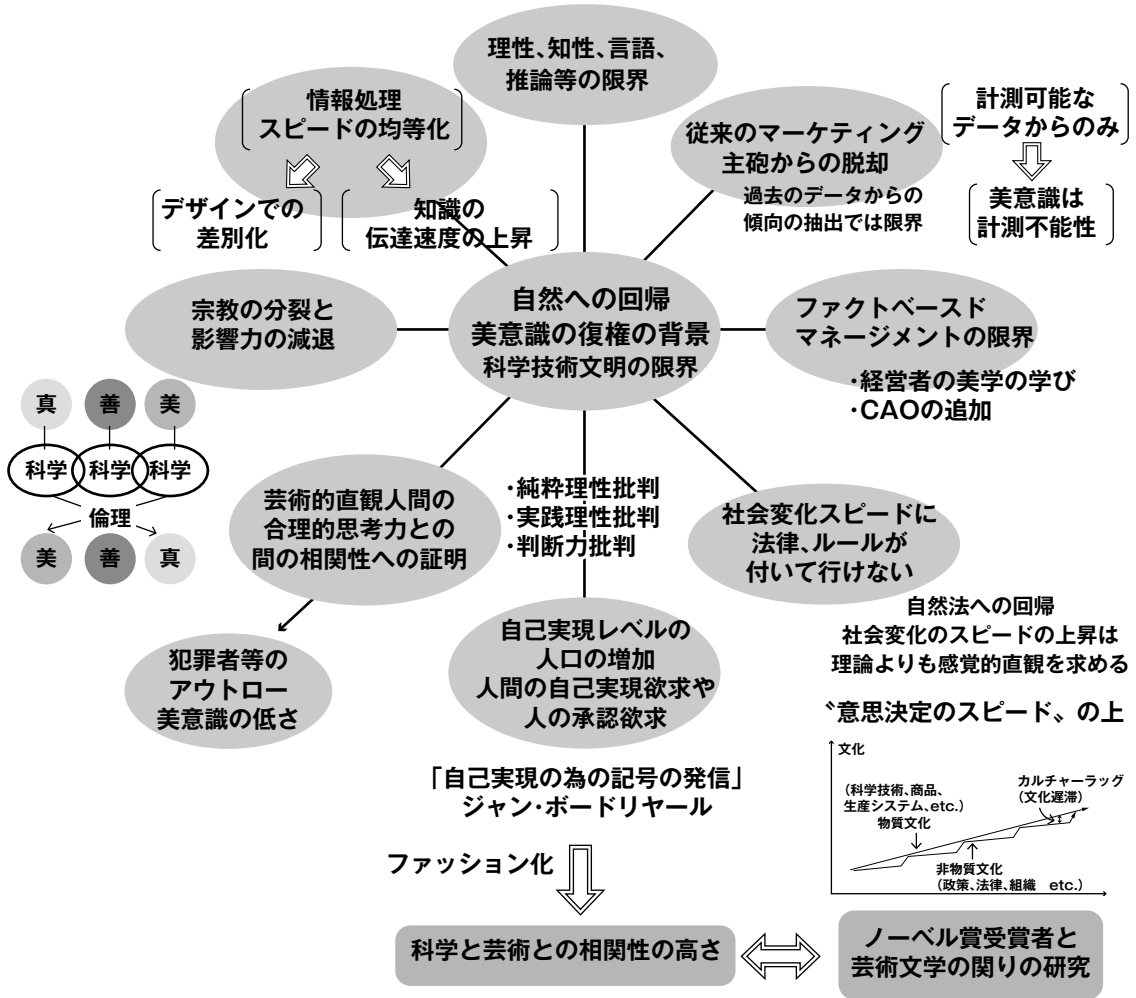


図3 美意識の復権への背景

さてここで少し日本人の本来持っている筈の美意識と関連する事柄を

8. 日本人の自然主義と 美意識の時代的必要性

し、新しい生き方を模索する事が不可欠である。その為には、身近なところから生活の場面の一部として農業を始める事が良策である。まずは自分の家のどこかで、そして可能であれば自分で菜園を持ち、自分と身の回りの人々に健康な野菜を届けると共に、その作業を通して自然との関係を深め、そこに意識を集中し、自らの美意識を涵養する事である。それは、ペランダの隅でも、狭い庭の一隅でも良い。生命の誕生、成長を見る事は、人間と自然の関係を徐々に深めてくれるのである。そして日本人全員が再び、農民としての資質を身に纏い、専業として農業を担う人々を大切にし、より健康的な農産物を育ててもらおう事である。そして全てが「野菜を作る」のではなく、「天から人事を尽くして授かる」と考えられるようになる事である。

見ていく事にしよう。

1つの例として洋の東西の建築を例に挙げて、考え方と技法を見ていく。基本的にヨーロッパ建築のベイスの考え方は「自然は悪魔の棲み家であり、諸悪の根源である」と考える。それ故、「自然の中に人間の存在を主張する形」でパルテノン神殿の如く屹立する壮大な建築物を構築する事を旨とする。そしてその様式美の原理としてパルテノンの神殿に採用されている自然界には存在しない対称形(シンメトリー)と、どうしてそれが美しいのかを知ることの出来ない黄金分割を主なデザイン技法として採用している。

それに対し、日本建築においては「自然は神の棲家であり、善の根源である」との認識の下に、まさに千利休の4畳半、あるいは3畳の茶室に代表されるように「質素で出来る限り自然と屹立することなく、息をする素材を用いて、ひっそりと自然の一角に佇む形で存在するという形」の考えの下に作られる。まさに自然の中で自然と対立しない佇まいという視点が重要となるのである。出来る限り呼吸をする材料(土、紙、

竹、材木、藁等々)を用い、自然の形状、色彩を邪魔することなく、周囲の自然の環境と調和するものを用いて作る。結果として非対称となり、曲線や自然の形状を活用する。あくまで自然と対立することなく作られている。そうした自然の美の法則(フラクタル理論、1/fのゆらぎの理論、フーリエ理論、黄金比、白银比等々)が、日本建築の中に意図することなく自然を手本とする事によってふんだんに組み込まれている事が理解され始めている。

まさに自然美に裏打ちされた日本人の美意識の反映こそが茶室や多くの神社仏閣に見られるものであり、そこには空間構造物としての建物のみでなく、人間そのものの行為としての手入れとお迎え(一期一会)精神の発露として、そして客や季節によって替えられる調度品が建築と調和された形で用いられるべく備えられている。と同時にその精神や美意識の発露として作法も、美しく、かつ質素に整ったものとして備えられている。

『縮み』志向の日本人(李御室)に示された如く、日本人の工作物(ミ

クロコスモス)の背後には宇宙というマクロコスモスが常に反映している。そのミクロコスモスには日本の豊饒な、かつ精緻、微妙で陰翳を持つ自然が日本人の製作物、工作物を通してその中に深く反映しているのだ。また日本の自然の光とその陰影が放つオーラは、様々な建物や絵の中にも取り入れられて、それらを魅力的なものにしている。

こうした日本の豊饒な自然の作品への巧みな取り込み方は、日本に来て日本を理解しようとする人々の心を打ち、ヤポニスム(ジャポニスム)として取り入れられたり、マイセンの陶器へ影響を及ぼしたり、印象派の画家達、ゴッホやゴーギャンらに影響を与え、ガレーやグリム兄弟等ナンシー派の人々に大きな影響を与えてきた。

また日本の庭園は、世界の美の判る人々から賞賛され、海外にもたくさん日本の庭園が造られると共に、その様式が世界各地の庭園造りに影響を及ぼしている。今日世界的に有名なイングリッシュガーデンは日本の庭園を参考にしたと言われている。

世界各地の民族は、各々が各地の自然の影響を反映しているが、日本の自然の持つ豊饒さはひとつ頭が抜き出ている、その多様性と複雑性、そして固有の美しさは、自然の持つ変幻自在の多様性とその調和を反映している。まさにそのレベルは群を抜いていると言えるであろう。

非対称形の盆栽の中に盛り込まれている。天地人の空間の配分に基づく姿、形の美しさ、そして永遠と瞬間の時間の組み入れ、そして有機の生命観と無機の静謐等々、実にそこで表現されるものは精神的に豊かであり、美しい。

まさにそうした高い次元の美意識が、日本文化の深奥として、存在している。それ故、これから日本がより知られる事によって、より多くの海外の人々を日本に引き付けるであろう。しかし今の日本には問題がある。それはそうした貴重な祖先の築き上げて来た財産を今の日本人は、自然との接触の薄さから、徐々に失いつつあるのだ。その事が本論の中心課題である。何とか再び、そうした日本の自然の豊饒性を受けた日本人の美意識を生活レベルの中で

再現していききたいものである。それも一部のハイカルチャーのみでなく、日本人の大衆の日々の生活の中に美意識を取り戻す事こそが大切なのである。その先駆者の一人が「民藝運動」を担った柳宗悦、その人なのである。

いかに今日社会のトータルな動きが美意識を求めているか？進歩とは破壊と創造行為の繰り返しの結果である。ここでは『何故、世界のエリートは美意識の回復に向かうのか？鍛えるのか？』の論点を纏めておこう。



南アルプス、富士山、八ヶ岳に囲まれた北杜市

## 9. 南アルプス、富士山、八ヶ岳に囲まれた北杜市での研鑽と実践

### ノの三位一体の追求を

現在私は、人生最後の拠点として山梨県北杜市高根町箕輪に移り、そこで日々生活をしている。そこに農業と食と健康をテーマとした「農食健研究所」を設立し、研究し、その成果を実践する努力をしている。

何故、私が山梨県北杜市に居を構えたのか？最初から意図していた事ではないが、開けてみると、何かそこに至る必然性が私の人生にはあったように思えるのである。

私が生を受けたのが1944年で第2次世界大戦終戦の前年であった。疎開先の大分県別府で、温泉を産湯として誕生した。何と逆子で、へその緒が3重首に巻き付いていて、1万人に1人の生存確率であると言う。しかし無事授かり育った。

ところが別府に居たのはわ

ずか数週間であった。その理由は、父親が中島飛行機製作所の技師であり、私が生まれた頃には中国へ指導に行っていたのだが、私の誕生後直ぐに日本の東京に戻って来たので、母は生まれて直ぐの私を連れて、当時ギョウギウウの満員電車に乗って、3日間かけて東京に戻ったとの事であった。母の父は近衛兵であったが、元々霞ヶ浦の予科練飛行場の反対側の出島の出身であり、私が生まれた当時は千葉県市川市の八幡の「藪不知」の近くに居を構えていた。

市川市の八幡は、山下清氏がいた八幡学園があるところである。我が家族は、東京青山に居を構えていたが、空爆で焼かれ住む場を失い、その伯父の家に戦後しばらく同居をさせてもらっていた。その後市川市の国府台に移った。小学校は最初『古事記』に出てくる真間の手児奈山の近くの真間小学校に通っていたが、小学校2年生の時に新しく出来た国府台小学校に移った。この小学校の裏に精神病理学者であり、白樺の一員であった式場隆三郎氏が設立した薔薇の庭園が美しい精神病院があり、この式場隆三郎氏は、山下

清画伯を育てた方であった。

私の人生を振り返ってみると、幼少の頃は、千葉県手賀沼、印旛沼、茨城県霞ヶ浦の3つの湖沼に関わって生活をしてきた。その印旛沼は私の小さい頃に母について買い出しに行った折であった。ところが闇物取引禁止で、交換した食糧を警察に没収された地でもあった。その時は警察は弱い者いじめをする山賊だと本当に思っていた。そして若い頃は東京の本郷と石川の金沢、長野の茅野、そして岡山の倉敷と関わり、今日は山梨と関りを持っている。実はこれらの場所が、私の人生と深い関係を持つと共に、『白樺派』と深い関りを持っていた事が判った。それは日本一日照時間が長く、星空が良く見え水と空気がきれいで、野菜と果物が豊富な山梨県北杜市に移ってから判ったのであった。

白樺派とは、同人誌『白樺』に集まった人々であり、文学や芸術、あるいは哲学や医学に関わった人々のコミュニティであり、当時の社会主義文学の田山花袋、永井荷風らと異なる感を抱いていた人々の集まりであった。社会主義文学の生まれた背



景には、その前に偽ロマン派があったからであった。もっとロマンのみでなく、リアルさが文学においても必要を考えた人々の集団であった。そして、さらにその逆に振れたのが白樺派であった。

私の人生と白樺派とどう関係があるのかをもう少し詳しく述べさせていただく。まず幼少の頃の生活の場、遊びの場が、その頃は白帆の美しい船が走っていた霞ヶ浦と、周辺に農家が多く、ウナギの美味しい手賀沼であった。そして母について成田線の「安食」駅で降り買い出しに行っていたところが、『日月神示』の岡本天明の啓示を受けた神社が近くにある印旛沼の湖畔の農家であった。私にとって、『日月神示』は影響を受けた本の一冊であった。

白樺派の話しの始めになるのだが、手賀沼の湖畔に居を構えたのが、「柔術に礼節と精神を加え、それらを統合して形として柔道にした」講道館の嘉納治五郎氏であった。彼は親戚の柳宗悦（母が嘉納治五郎の姉）を手賀沼に呼び、その柳宗悦が、武者小路実篤と志賀直哉を呼び、白樺派のコミュニティが誕生

した。

私が住んでいた本郷の坂の下が講道館であり、多くの有名な柔道家が家の近くに住んでいた。私は柔道の嘉納治五郎氏、剣道の千葉周作氏を愛した一人である。

その柳宗悦が入手したロダンの考える人を見学したくて訪ねたのが、何と山梨県北杜市出身の浅川伯教、巧兄弟であった。その兄弟の誕生地も彼らの記念館も、現在私が住んでいる北杜の家のすぐ近くにある。何とも不思議なものである。

柳宗悦を訪れるに際し、浅川氏は朝鮮半島の上流階級が用いた「高麗青磁」ではなく、庶民の生活の中で活用されていた「白磁」をお土産として持参した。その白磁に民衆芸術の素晴らしさを感じた柳宗悦は浅川氏と共に朝鮮半島の民藝の保存、活用に日本人として協力すると共に、日本戻って民藝運動も展開したのであった。

その柳宗悦と志賀直哉と一緒に、バーナード・リーチを訪ねて渡英したのが、精神科医の式場隆三郎氏であった。実は、私の通った国府台小学校の裏に式場病院があるだけにな

く、式場隆三郎氏の息子は私の小学校の友達であった。何とも不思議な縁である事が、今になって判ったのであった。

ちなみに北杜市には、清春芸術村があり、そこには志賀直哉の家が移築されて、今は博物館として活用されている。実に春夏秋冬毎に、雪月花の如く美しい自然に囲まれている館である。そして北杜市には、白樺派の人々の交流のあった金田一京助の記念館や平山郁夫シルクロード博物館もある。

そして何と私の研究室のあった駒場の宇宙航空研究所の裏門の前に民藝運動の中心の1つの「日本民藝館」があり、その敷地は旧加賀藩の下屋敷の後であり、加賀藩から本郷と駒場の敷地と共に提供されたものであった。その加賀藩のあった金沢は、35年間客員教授として長年勤めた金沢工業大学があり、加賀藩の有力家臣の子孫である百万氏とは一緒に仕事をした。

またその間に能登半島の鳳珠郡門前町大生（今は輪島市）に、私が村長になって、曼荼羅村という別荘村を設けた。そこには輪島塗の巨匠

（革命者）角倅三郎氏の工房や、今売れっ子の陶芸家の荒木氏の登り窯があり、神戸の灘六郷の銘酒『福寿』の酒心館があり、多くの民藝品や食器の製作者が集まってくれていた。桂文珍氏もそのメンバーの1人であった。

そこに行く間に、宇野気という街があり、そこは私が多いに啓発を受けた西田幾太郎氏と鈴木大拙氏の出身地であった。

この2人は、柳宗悦が学習院大学の学生であった頃に、西田幾太郎氏が独語を、鈴木大拙氏が英語を教えたようだ。そして私の文庫には、二人の著作がどっさりと並んでいる。

さて話は戻るが、日本民藝館の土地の話に加え、その出資者は、何と倉敷の大倉孫三郎氏であり、当時のお金で10万円を寄付されたこのことであり、その資金で日本民藝館は建造され、初代の館長に柳宗悦氏が着任した。私は高校生の修学旅行の時、京都から鷺羽山と倉敷に行き、そこにあるアイビースクエアの中に掲げられている大原孫三郎氏の「いつでも1番になれる2番でないさ」という家訓を自らの座右の銘と

して生きてきた。それにちなんで車の番号も常に「2222」である。更に大原孫三郎氏の自分の家を作る為に「周囲の人々にも、資金を提供し、一緒に街並みを美しく整えた」との話しに大変に感銘し、生涯その銘を忘れないで生きている。また倉敷のある岡山県は、飛岡姓の多い県でもあり、私の大学院時代の研究室の助手のヒナ田さんも岡山出身である。そして良く一緒に集まり酒を呑んだ政治家の平沼赳夫氏も岡山の池田の殿様の子孫であった。更に『日月神事』の岡本天明氏も岡山出身で、千葉県の印旛沼で神の啓示を受け取ったのであった。

また大原美術館の中には、芹沢銈介の藍染の美術館がある。彼も民藝運動の一員であり、私の大好きな静岡県の登呂の遺跡の中にも、彼の名前の付いた美術館があり、のれんや間仕切りを始め、多くの作品が展示されているので度々訪れていた。そこには弥生時代の赤米の水田稲作の光景が再現されている。

まだまだ私の人生と、白樺派、そして民藝運動との関係の色々と見出せそうである。しかしこの話は、

この辺にして、私が北杜市に移って、そこで農食健研究所を設立した事によって、〴〵白樺派との関係を辿る事が出来たが、私はこの地でやらんとしている事はやはり、日本の農業の立て直しであり、真に化学的農法に負けない次世代型の有機農法や自然農法の開発、普及である。その為には自然のメカニズムとそれぞれの持つ美を良く知る事であり、アートとサイエンスとテクノロジーの調和と融合なのである。

実際に北杜市の農食健研究所を1度訪ねていただきたい。不思議な事に、私は今「智の梁山泊」のメンバーとして週に1度、TV会議で知の学びをしているが、そのメンバーの1人が福井県にある大徳寺の太田住職で、柳宗悦の直弟子の1人であった。まさに民藝運動の推進者の1人であり、住職の話しの時には民藝品の数々を実際にお見せいただき、お話しを聞かせていただいている。また住職の親戚が、西田幾太郎記念館の館長をされているとの事であった。

また私は、哲友でもある韓国の友人金泰昌氏が「今まで言葉を用いて人々の平和になるべく公共哲学を

始め、様々な学問をしてきたが、言葉では限界があることを実感し、これから「美」が大切であり、その考えの下に研究を進めると、柳宗悦の民藝運動がいかに大切であったかを知った」と語り、そして、「彼の業績を一纏めにする言葉が無かったが、ギリシャ語の「カロン（Kalon）」＝美」と、世界中で諸々が大量に殺されている事を表現する「cide」を組み合わせて、K a l o c i d e（美の崩壊）と表現したら良いだろうとし、それをこれから用いる事にした」と語ってくれた。その柳宗悦が民藝に触発されたのは、北杜市出身の浅井兄弟である。

そして、その金泰昌氏と『未来共創新聞』の編集長の山本氏と「比較文明学会」の元会長原田氏と、『公論』の編集長の林氏とが一緒に、北杜市へ来て一晩語らうと共に、浅川兄弟の北杜市の記念館を一緒に訪れたのであった。その事が私の本論を書く契機となったのであった。まさに農業こそが日本人の美意識の涵養の原点なのである。

ちなみに「農食健研究所」の設立主旨は次の如くである。

1. 人は何故生きているのか？
2. 人はなぜ食べるのか？
3. 人は何を食べたら良いのか？
4. その良い物をどのように作るのか？
5. 作られた食物を、どのように保存し、移動するか？
6. どのように料理したら良いのか？
7. どのように食べるべきか？
8. どのように片付けるべきか？
9. etc.

これらを、最先端の科学技術を用いて、現在の食の問題を解決しつつ、古への食の状態へ戻すという考え方が基本理念である。多くの関係者の方々が北杜市の研究所を訪ねてくれ、まさに「食禪食悟」を語り合っている。興味のある方は、いつでも訪ねていただきたい。共に日本の未来を、日本人の美意識を通して、それ故農業を通して語りたいと思う。ちなみに「食禪食悟」は、曹洞宗のお坊さんの成毛泰造氏が彼の作ったワインに付けている名前である。